

平成 22 年 5 月 26 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520635
 研究課題名（和文） 第三共和政前半期（1870－1914 年）のパリにおける地方出身者と宗教
 研究課題名（英文） Provincial people and their religion in Paris during the first half of the French Third Republic (1870-1914)
 研究代表者
 長井 伸仁（NAGAI NOBUHITO）
 徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・准教授
 研究者番号：10322190

研究成果の概要（和文）：本研究は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのパリに地方から移住してきた人びとの言語的・文化的特性について、カトリック教会という場を通じて検討するものである。研究の結果、そのような特性は史料からはほとんどうかがえなかった。これは、特性が弱かったか、あるいは、当時は特性がさほど意識されていなかったかの、いずれかを意味していると思われる。社会科学の分野でなされた研究に鑑みると、後者の可能性に一定の重みを与えるべきであろう。

研究成果の概要（英文）：This study aims to examine linguistic and cultural characteristics of the provincial people who came to Paris during the second half of the 19th century, by looking at the actions of the Catholic Church for this people. In the historical documents we gathered, we found few mentions of these characteristics. It may mean either that they were not so strong, or that they rarely attracted attention of contemporaries. Researches done by a group of geographers and sociologists suggest the second hypothesis.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：フランス近現代史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西洋史、都市史、宗教、近代、移民

1. 研究開始当初の背景

本研究は、第三共和政前半期（1870～1914 年）のパリにおいて、地方から移住してきた人びとが宗教や教会とどのような関係にあったのかを実証的に明らかにし、そのうえで、それが彼らの文化的・政治的アイデンティテ

ィにどのように反映されていたのかを検討することを目指した。

地方出身者がはたして近代パリ社会に統合されたのか否かは、この半世紀、フランス都市史研究の主要テーマのひとつであった。この主題についての歴史研究者の見方は、こ

れまでかなりの変遷を経てきた。

おおむね 1960 年代までは、入移民はパリでは別個の集団を形成することなく、全体として統合されていたという見方をする傾向が強かった。ルイ・シュヴァリエの主要著作のひとつ『19 世紀パリ人口の形成』(1950 年)は、その典型的な例である。ところが 1970 年代になると、地方文化を称揚する時代の風潮にも後押しされながら、地方出身者の共同体や組織に歴史研究の目が向けられるようになり、むしろパリ社会における彼らの独自性が強調されるようになった。代表的な研究は、オーヴェルニュ地方出身者のコロニーを取り上げた、レゾン=ジュルドの学位論文であろう。そこでは、上京の経緯、コミュニティ形成の過程、結束や政治的影響力などが詳細に描き出されている。

ところが近年、選挙人名簿や徴兵文書を利用した歴史人口学的研究が進むにつれ、こうした見方は根本的に修正されつつある。転機となったのは、アラン・フォールが 90 年代に入ってからおこなった一連の研究、とりわけジャン=クロード・ファルシとともに 2003 年に公刊した Alain Faure/ Jean-Claude Farcy, *La Mobilité d'une génération de Français*, 2003 である。そこでは、出身地ごとに特定の街区に集住するのは入移民の一部にすぎず、大半は市内に散住していたこと、婚姻においても非同郷婚が支配的だったこと、などが実証された。地方出身者はむしろ、パリ社会に統合されていたというべきなのである。

これらの研究で指標とされたのは、集住/散住、同郷婚/非同郷婚、地理的流動性、職住の距離などであった。これらはいずれも、いわば量的・空間的な指標である。しかし、当時のフランスにおいて、人口の質的な特性は重要なものであった。たとえば、19 世紀末に多数の上京者を出したブルターニュ地方のフィニステール県では、20 世紀初頭でも成年の過半数がフランス語の基本的な表現さえわからず、子どもの多くは小学校入学時点ではフランス語をいっさい知らなかったという。フランスがほぼ 19 世紀を通じてこのような状況にあったとすれば、人口増加分のほとんどを地方から供給されていたパリは、均質な都市社会だったとは考えにくい。あるいは、パリがかりに「坩堝」として、人びとの文化的な差異を消していったにしても、入移民はその坩堝にどのようにとけ込んでいったのか、という疑問も生じる。これが、本研究の出発点となった問題意識である。

実のところ、この点は、研究において十分に注目されてきたとは言いがたい。もちろん先にふれたように、70 年代に地方出身者のコミュニティに関心が寄せられた際、いくつもの研究がなされた。しかし、それらは基本的に

はモノグラフであった。だが、個別の事例の集積を具体的な歴史像に結びつけるのは難しい。特定の集団を取り上げ、それについて内在的に理解を深めていけば、特殊性が強調されるが、それを全体の中でいかに位置づけるかという問題が不可避となるからである。このことは、モノグラフには共通した課題であろうが、移民についての研究にとくに見られるように思われる。

2. 研究の目的

上記の問題意識にもとづき、本研究ではカトリック教会を主たる対象に設定した。

教会に注目したのは、それが近代フランス史においては文化的多様性の擁護者という側面をもっているからである。近代フランス史を貫くさまざまな対立軸の一つに、カトリシズムと共和主義のそれがあることは、いまやひとつの歴史像として定着している。革命は普遍性を志向し、そのなかでフランス語を「理性の言語」として広めようとしたが、そのフランス語は、「ヴォルテールの言語」とも呼ばれたように、カトリック教会にとっては革命と結びついた存在であった。したがって、カトリック教会の認識や活動を見ることで、すなわち、視点としてまた場として教会に注目することで、先に述べた問題を検討できるのではないかと考えられる。

このように、地理的にも時期的にも限定されているものの、都市史研究の枠、特定地域出身者についての研究という枠を越え、フランス近代社会のあり方まで見通せる射程をもった研究として、取り組むこととした。

他方で、ここ十数年、フランスを揺るがせている「スカーフ問題」にみられるように、文化や宗教と市民社会とのかかわりは、現代の世界においてきわめてアクチュアルな問題である。したがって本研究はたんなる歴史研究を超えた意義をもちえるものである。

3. 研究の方法

研究に際しては、地方出身者を対象とした事業(*oeuvres*)、司教区の認識、の二点に注目した。

19 世紀パリの人口増はおもに地方からの人口流入によるものであったが、世紀半ばまでにはカトリック教会もこうした地方出身者の独自性を認識するようになった。すなわち、パリのそれとは異なる言語的・文化的環境に出自を持ち、伝統的な紐帯から切り離された(とみなされた)人びとを、教会につながり止め、さらには、共和主義や社会主義などの都市の政治的「悪習」からも守ろうとしたのである。こうした意識を背景に、1860 年から地方出身者向けの事業が設立された。こうした事業は、しばしば末端の教区や個々の聖職者のイニシアティブで設立されており、

実際の活動も既存の教区の枠組みに依拠するかたちでおこなわれていた。他方、このような具体的な組織の枠外でも、地方出身者に対処するかはパリ司教区にとって重要な課題だったはずである。世紀末には市人口のじつに3分の2がパリ以外で生まれていた計算になる。司教区も何らかのかたちで全体的な取り組みをなしていたと考えられる。

4. 研究成果

まず、入移民のあり方を知る手がかりとして、同郷会(sociétés d'originaires)について概略を調べた。さまざまな史料によれば、同郷会は、パリでは19世紀前半から設立がみられ、1880年代から叢生した。20世紀初頭のある証言によれば、文芸協会や政治協会などは除いても、300近くが存在したという。形態は、互助会と協会の2種類があり、互助会は、地方出身者に関しては76、会員は合計で25,000~30,000人ほどを、協会は、地方出身者に関しては約200、会員は合計で70,000~80,000人ほどを数えたという。

協会の活動は多岐にわたったが、文化的な領域でのそれは目立たないものだった。たしかに、文芸協会が存在し、文化的活動を中心に据えていたのであるが、それらは文筆活動や講演会の組織に終始するエリートのサークルであり、民衆層には基本的に関わらない。民衆層を対象としたと思われる団体にとって、言語や習慣の差異を埋めよう、それを通じて入移民の受け皿となり都市社会への統合を促そうという姿勢は、ほとんど見受けられなかった。

世紀転換期のフランスでは、地域主義が隆盛を見、またパリでも同郷会が百花繚乱の様相を呈したが、その基盤に言語的・文化的差異を見いだすことは困難である。このことは、同郷会の隆盛の理由や背景をどう考えるべきかという、一つの重要な問題を提起しているように思われる。

つづいて、カトリック教会の側で、入移民を対象に活動していた事業について、比較的史料が残されているブルターニュ地方出身者向け事業の例を調査した。

世紀転換期のパリでは、ブルターニュ地方出身者を対象とした事業としては、「ラ・ブルターニュ」と「ブルターニュ教区」の2団体が存在した。「ラ・ブルターニュ」は、1890年代前半にレンヌで結成された。自身を「親睦会であり、互助会である」とみなし、パリおよび郊外に住む不幸なブルターニュ出身者を援助することを目的とした。もう一つの「ブルターニュ教区」は、1897年、ヴァンヌ司教区の一司祭カディックにより設立され、パリ6区のノートルダム=デ=シャン教会を拠点にしていた。

活動はいずれも、域外に出たブルターニュ出身者に交流の機会を与え、信仰・道徳・伝統を維持し、富者が貧者を助けるかたちで物質的に援助する、というものであった。だがここでも、活動の中で文化的なものの比重は大きくはなかった。

なお、司教座の認識を知るべく、公報に近い性格をもつ『パリ宗教週報』も閲覧した。ここでも、入移民の言語的・文化的な特徴についての言及はまれであるし、そうした分野で教会が活動する必要性も、ほぼ19世紀のあいだは主張されていない。入移民にふれられる際、かれらが仲間内で連帯することは自明であるかのように述べられるが、何がその連帯を作りだしているのか、どこまで必然性があることなのかは不明であった。

以上の知見については、おそらく二通りの解釈がなされる。ひとつは、パリに移り住んだ地方出身者は特殊性を有していなかったというものである。それは、出発地においてある程度の選抜がなされた結果かもしれないし、パリで適合した結果でもありえる。もうひとつの解釈とは、そのような特殊性が重要なものとは認識されなかった、というものである。

第一の解釈については、特殊性を示唆する史料も一方であることから、パリ全体でみればそれが強くはなかったということになる。ただ、だとすればなぜ、地方出身者向け事業や同郷会が組織されたのか、という根本的な疑問が出てくる。全国的な地域主義の隆盛、パリでの地方出身者向け団体の文字通りの叢生、その背景としての人口流入が、それぞれ史実として確たるものであれば、なおさらである。

他方、第二の解釈も考えておかねばならない。他分野での研究が、そのような可能性を示唆しているからである。それは、地理学者フランソワーズ・クリビエのグループによる研究で、「国民老齢保険公庫」のパリ地域の資料をもとに、1972年に退職して年金生活に入り、かつパリ圏に住んでいる人びとを対象にしたものである。注目したいのは、聞き取り調査でのやりとりでも言語的・文化的な差異にはほとんど言及されない点である。対象となった集団には、地方出身者はもちろん、外国人も含まれている。文化に対する認識が、そもそも現在とは異なっていた可能性がある。

今後の方向性としては、都市における教育・学校を研究対象とすることが考えられる。また、政治とりわけ選挙への地方出身者団体の関与も、調べておかねばならない。いずれにせよ、都市社会全体を見渡せるよう意識しておく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① 長井伸仁、「プロソポグラフィとミクロの社会史—フランス近現代史研究の動向から—」、「思想」、査読無、1032 号、2010 年、143-159 頁。

② 長井伸仁、「都市の入移民と文化—19 世紀パリの事例から考える—」、「史潮」、査読有、新 66 号、2009 年、47-56 頁。

③ 長井伸仁、「19 世紀後半のパリにおけるカトリック教会と入移民—地方出身者を中心に—」、「関学西洋史論集」、査読無、31 号、2008 年、11-17 頁。

[学会発表] (計 3 件)

① 長井伸仁、「都市の移民と文化—19 世紀後半のパリにおける地方出身者の事例—」、日仏歴史学会第 2 回研究大会、2010 年 3 月 27 日、奈良女子大学。

② 長井伸仁、「近代のパリにおける地方出身者とカトリック教会—第三共和政前半期 (1870-1914 年) を中心に—」、第 13 回ワークショップ西洋史・大阪、2008 年 6 月 21 日、大阪大学。

③ 長井伸仁、「19 世紀後半のパリにおけるカトリック教会と入移民—地方出身者を中心に—」、関学西洋史研究会第 10 回年次大会、2007 年 11 月 18 日、関西学院大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長井 伸仁 (NAGAI NOBUHITO)

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部・准教授

研究者番号：10322190

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：